

民家

日本の民家を次代に引き継ぐ

2019
No.109

季刊 **春**

4月1日発行



特定非営利活動法人(認定NPO)
日本民家再生協会



製材



裏山の木伐倒



隣家に倒れないか心配だった屋敷裏手の山の木。



製材後の自然乾燥



裏山の木伐倒 良質の大木。



差鴨居は各所にシロアリの害があり、取り換えた。



屋根施工中 茅の状態は良好だったので整形して下地として残した。

年ほどと思われる主屋は40年前の改修でかなり補強がされていて、ゆがみも少なく良好な状態でした。関東大震災、東日本大震災を経験していましたが、その影響はみられませんでしたが、しかしシロアリの被害は各所にあり、それなりの手当てが必要でした。材木を伐り出す山は屋敷の周りを囲むように広がっており、なかには巨木といつていいものもありました。里山なので伐採して搬出することは困難ではないと判断しました。

このようなケースでは、施工者の選定が成否の鍵になります。今回は地域の製材業者として山に入り、山の管理まで手掛けている施工者を選び依頼しました。過去に私の事務所が民家再生を依頼した時にうまく仕上げてくれたので、選択しました。

直径1m近くのスギの巨木の伐倒は圧巻で、製材すると良質で見事な材料が揃いました。冬に伐倒、製材して板材とし、約1年乾燥させました。節の多い材は下地に、節のない材は内外壁、床の仕上げと建具に使いました。

外壁は15mmの杉下見板張りです。ずいぶん厚いと思いましたが、施工者の勧めで採用しました。床は15mmの下地板に、30mmの厚板です。床の断熱材は不要でした。ヒノキは大径木はなく、虫も入っていたのですが、伐採して良いところだけ選んで縁甲板に加工し、広縁の床に使用しました。

裏山のスギの大木を製材し 築130年の民家を再生

民家再生事例
千葉県多古町
[菅澤武兵衛邸]
ゆま空間設計

再生後 15畳の和室から裏山のスギで仕上げたLDKを見る。



再生前外観

山の手入れと再生を決断

千葉県多古町にある菅澤武兵衛邸のあるじ根本成光さんは、本来この家を継ぐ立場ではありませんでした。親が亡くなり相続をする段になって、長男が相続を放棄し、兄弟3人が話し合っって次男である根本さんが受け継ぐことになりました。自身は結婚して姓も変わっていましたが、生まれ育った家に愛着が強く、農家暮らしも嫌いではなかったので引き受けたのです。車で1時間ほどの千葉市内に住んでいますが、ほとんどの時間を多古の実家で過ごし、自宅に帰るのは週末だけです。

家の周りには所有する田畑、山林があり、収穫や屋敷の管理で一年中忙しい生活です。定年退職後ののんびりとした暮らしは一変し、多忙だが充実した毎日です。

山の木を使う

お宅を訪問してみると、築後130

根本さんが私に仕事を依頼したのは、相談していたハウスメーカーに、裏山の木を使って民家再生をしたいという希望を断られたからでした。伝統技術を売りにしているハウスメーカーでしたが、裏山の木の伐倒製材からという要望は一笑に付されました。材料の質も保障できないし、そもそも費用がいくらかかるかわからないというのです。そこでハウスメーカーに見切りをつけ、インターネットで探し回り、千葉市内の私の事務所にたどり着いたのです。

過ごしています。

農地はできる範囲で耕せばよいし、部落に残っている働き手に貸すこともできます。悩ましいのは山林で、ほとんど放置された状態でした。かつて林業をしていた山は良質のスギ、ヒノキが育っていますが、そのままにしていると溝腐れ病が蔓延してしまいます。実際かなり進行していました。

健全な木でも100年以上のスギは高木になり、強風で倒れて付近の民家に被害を及ぼすことがあります。できる範囲で管理されていましたが、限界があります。そこで山林の手入れと民家再生を併せて行おうと考え、私財をつぎ込んで、主屋に思い切った再生工事を施すことを決意しました。

*溝腐れ病：スギにとって深刻な樹病。幹に縦長の溝ができ、さらに進むと幹がねじれて奇形になる。



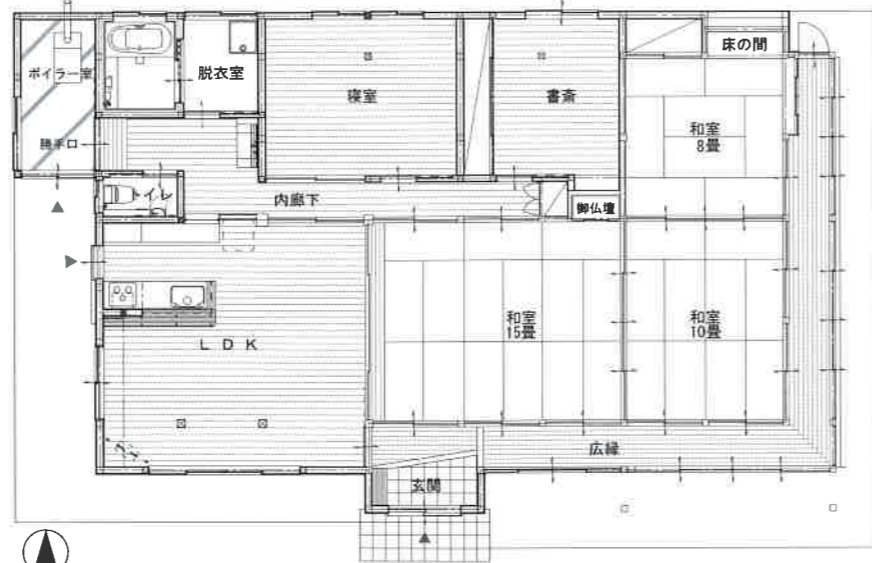
再生後北側外観



北側寝室 壁と床はスギ、天井は漆喰で仕上げた。



裏山のヒノキを使った広縁



再生後平面図

[菅澤武兵衛邸]

改修後延べ床面積:184.88㎡ (55.9坪)

構造:木造平屋建て

竣工年:2016年12月

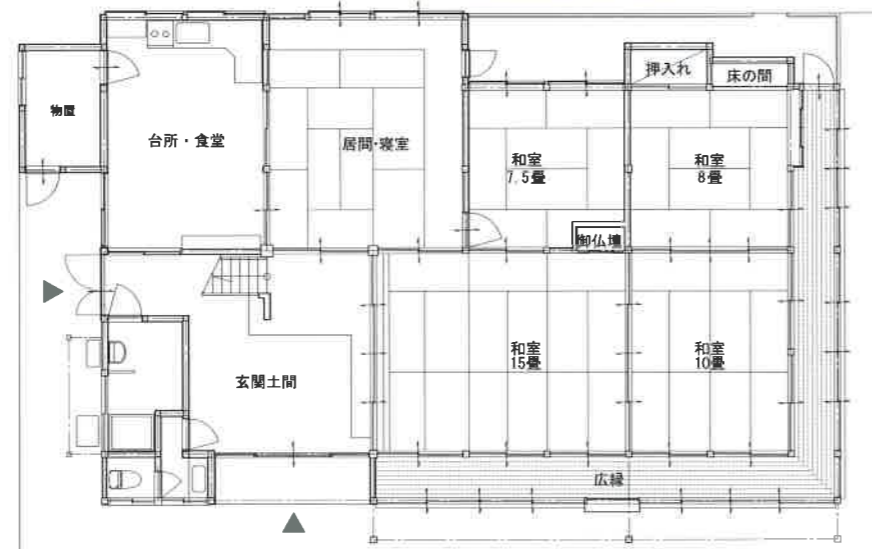
施工主:根本成光

設計監理:株式会社ゆま空間設計

施工:丸西建材有限会社



再生前の居間・寝室 暗いので昼でも照明を点けていた。



再生前平面図



再生後南側外観 屋根はもとの茅を下地にガルバリウム鋼板葺き。



LDK 中2階の天井まで吹抜けとした。



15畳の和室から10畳の和室を見る 清掃と漆喰塗だけで蘇った。



LDK 内壁と床のほかにキッチンカウンターと障子も裏山のスギを利用して作った。

民家のポテンシャルを引き出す

既存の間取りは、普段はあまり使わない和室15畳、10畳、8畳が東南の角に位置し、南西は土間と水回りでした。つまり台所、食堂、寝室といった生活の場はほとんど陽の当たらない北側に集中していましたが、今回これを改善したいとの希望でした。

当初、陽当たりも風通しもよい南東の角を居間にする案を提案しましたが、南東角の和室3室続き間はこの家のシンボルとなる場所で、そのままの形で残したいとのことでした。そこで土間部分をLDKとし、居心地の良い居住環境を確保することにしました。土間も民家の重要なエレメントなのですが、現在の暮

らしぶりとやや馴染まない面もありますが、その結果玄関が難しくなるのですが、割り切って和室前に小さく設えました。玄関は普段は使わず来客用とし、ポイラー室を勝手口として日常の出入りもつぱらこちらからすることにしました。

和室3室は木部を清掃し、漆喰部分を塗り直し、ふすまや障子を張り替えただけで見事に蘇りました。親戚が集まるとこの和室をよくぞ残してくれたと褒められるそうです。もとの土間はLDKとなり、中2階を支えていた梁は残して吹抜けにしました。普段過ごす部屋が陽当たりが良く暖かいのがありがたいと思います。屋根に葺かれていた茅は残したままなので夏でも涼しいそうです。

この家ももとのポテンシャルが極めて高く、必要なところのみ手を加えるだけで立派に蘇りました。自分の山の木を使うというコンセプトが面白く、2017年の千葉県建築文化賞に応募し、住宅の部優秀賞に選ばれました。

地域の製材業の実情

この現場では、地域に残る相応の製材業者を選定することで結果は得られましたが、山林と地域製材業の抱える問題は深刻です。千葉県のこの地域では、昔は地域の製材業者が近隣の個人林から材木を伐りだし、地域の工務店に流して家を建てる仕組みができていました。わずかとはいえ、それが小規模な山持ちの収入

にもなっていました。木材価格の下落や大規模製材工場によるプレカットが地方でも定着し、製材業者の仕事は失われてしまいました。自己防衛のために自ら建設業をしているのが実情です。80社ほどあったこの地域の木材組合の事業者は20年ほどで半分減り、その中で製材を続けているのは10社足らずといえます。山林もほとんどが放置されたまま手で付けられていない状況です。

民家再生の仕事を経験していると、その素晴らしさに魅せられます。古い民家のポテンシャルの高さは尋常ではありません。設計に際しては、間取りの欠点を直しながらもあまり手を加えず、本来あった形に戻すよう配慮して、整える程度の気持ちで臨みます。出来上がった住宅はハウスメーカーには到底まねのできない質の高い水準のものとなります。それが地域の製材業者と連携することで、比較的リーズナブルなコストで可能になります。

山林も地域製材業も活用さえできれば宝の山なのです。小規模の山林を対象に、伐採から植林までの事業を補助する林野庁の制度「森林経営計画」があり、これに前向きに取り組む製材業者もいます。放置山林を保全し、維持していくためには、地域製材業を過去の産業形態だと衰退していくのを傍観せず、彼らと連携する道を探るべきだと考えています。

(ゆま空間設計・千葉県・加瀬澤文彦)